夢の力

中上健次

夢の力

中上健次

北洋社

著者略歴

1946年和歌山県生れ。和歌山県立新宮高校卒。作家。1976年，「岬」で第74回芥川賞受賞。長篇小説『枯木灘』で，1977年毎日出版文化賞，1978年芸術選奨文部大臣新人賞をそれぞれ受賞。

著書　『十九歳の地図』『鳩どもの家』『鳥のように獣のように』『岬』『蛇淫』『枯木灘』『中上健次VS村上龍』『十八歳，海へ』『化粧』『紀州・木の国根の国物語』『中上健次全発言1970〜1978』がある。

夢の力

一九七九年二月二十七日　第一刷発行

定価一一〇〇円

著　者　中上健次

発行者　伊藤金吾

発行所　北洋社

東京都千代田区富士見二―二―一

電話　(二六四)〇五五一　〒一〇二

振替　東京一―一三三二四三

印刷所　豊国印刷

製本所　大　製

乱丁・落丁本はおとりかえいたします

© Kenji Nakagami 1979

目次

I

◇海人の海　4
風景の貌(かお)　5
心にひびいた言葉　15
熊野　17
大島・田子(たこ)　20
美しさを超えて映る半島　24
風景を飲む　26
私の中の日本人——大石誠之助　30
熱い血　36
天下の絶品　40
梅干の喧嘩　46
雨女と雪男　49
＊
私のスペイン　53

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

II

◇緋(あけ)の花　64
夢の力　65
小説の敵　69
根元的な場所——南部　72
地の神・地の霊　74
労働という祈禱と文学　78
鳥獣に類ス　81
短篇小説としての能　85
詩は軽蔑に価する　88
軽蔑したドストエフスキイ　92
奇妙な厭な所　95
戦争を欲する子供たち　99
戦後と私——江藤・本多論争を読んで　103
＊
心の滴　106

Ⅲ

◇一本の草　114
坂口安吾　空翔ける(か)アホウドリ　115
ファルスの光線　119
和田芳恵・老残の力　133
短篇小説の力――水上勉『寺泊』『壺坂幻想』をめぐって　143
安岡章太郎・肉感的文体論　155
出さなかった返書――小林秀雄を読む　161
蓄積された自然としての存在――秋山駿氏へ　166
読書ノートから　174
谷崎潤一郎「異端者の悲しみ」　174
丸山健二『朝日のあたる家』　177
丸山健二『火山の歌』　178
矢沢永吉激論集『成りあがり』　180

Ⅳ

◇野生の青春――「リラックスィン」　188

青春の新宿 189
ジャズの日々 192
路上のジャズ 196
一回限りの楽天的なコルトレーン 203
〝空飛ぶ豚〟 205
*
君の地図を映像の中に展開せよ 209
映画ノート,76〜,77 213
柳町光男「ゴッド・スピード・ユー!」 213
唐十郎「任侠外伝・玄海灘」 214
香港のピンク映画 216
山田洋次「男はつらいよ——寅次郎夕焼け小焼け」 218
ジャン・ピエール・メルヴィル「恐るべき子供たち」 219
マーティン・スコシージ「タクシー・ドライバー」 221
長谷川和彦「青春の殺人者」 222
大島渚「愛のコリーダ」 224
フランソワ・トリュフォー「トリュフォーの思春期」 225
ゲオルゲ・パン・コストマス「カサンドラ・クロス」 227

マイケル・カコヤニス「トロイアの女」 228
ジョン・シュレジンジャー「マラソンマン」 230

V

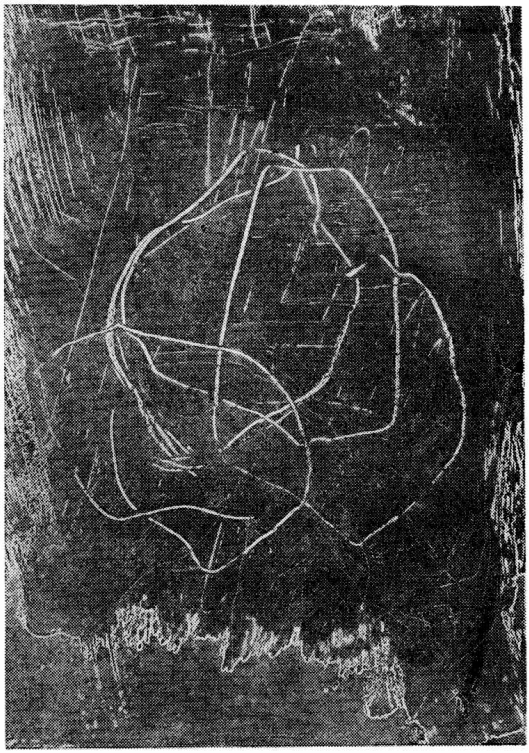
◇有難い湯 234
私の文章修業 235
犬の私 239
私は名人 241
小鳥の話 243
*
十八歳の頃 246
翻訳した詩 249
〈本〉の外へ飛び出したい 253
風景というリング 256
*
科白の悲しみ 258
和田さんの色 261

古山さんの味 264
その頃 267
小説家の酒 270
後記 275
初出一覧 276

夢の力

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

I



海人の海

潮の干満でその海水浴場の岩場は見え隠れした。波がその岩場でせきとめられ勢いを増した。海で泳ぎすぎ、耳に水が入っているのか、耳元で風が渦巻くのがはっきり分かった。太陽の熱で皮膚が焼ける。

そうやって砂に坐っていると、自分の知覚のひとつひとつが、ろくでもないのに見えてくる。あれこれ考えていることの脈絡がなくなる錯覚におちいり、その脈絡をつなぐにはいまいちど海につかり、遊び呆けるか、人にでも殴りかかるかしなければならない。だがそんなことも世迷言だ、と気づく。海のここで、だんだんアタマが狂ってくる。バカヤロー。死んでしまえ。よく大声で独り言をしゃべっている自分に気づき、常人でいる私の精神が冷や汗をタラリと流す。本当に汗の滴(しずく)のようなものが落ちるのだった。

ひと夏の予定で紀州・田原の海にいて〝自然〟というものにしてやられている。自然。海、山、川、水、風、一切合財その本当の姿は、面と向い合う人間を狂わせる力を持った奇怪な物なのであろう。狂うことを避けるのに、人間はせいぜい嫌悪の生理反応しか持てない。しかし私に嫌悪はない。嘔吐する事もなく海に入り、その度ごとに意識も心理も壊れる。

シャワーのある脱衣場にたむろした、この土地の漁師と覚しき大柄な若衆らが、水着姿の女らをからかっていた。女らの弾んだ笑い声がきこえた。岩場で釣った魚をオコゼと教えてくれたのは、その若衆らの一人だった。

オコゼとは山の神に奉納する魚である。

風景の貌（かお）

何度見てもあきない風景、何度行ってもあきない場所というものはある。長い間羽田空港の中で、外国向けの貨物を扱って飯を食べていたのであるが、その羽田へ向うモノレールからの風景が好きだった。丁度、大井競馬場のあたりから、整備場までの海側の景色である。いまから想えば、随分幼いロマンチシズムのように思うが、ヘドロと、埋めたてた土と、草と、荒涼とした感じが、私の何かをかきたてた。だからその景色らしい色どりの何ひとつない景色を見たいばっかりに、モノレールでは海側にいつも席を取った。

ダンプカーが荷台に土を満載して走っているのが見える。羽田で飛行機への貨物の積み降ろしの仕事にあきでもしたら、あんなふうなダンプカーの運ちゃんになろうと思った。その景色は、見ようによってはひところ流行のマカロニウエスタンの舞台にも取れたし、砂漠のようにも見えた。男が生きて死ぬのは、彩るもの何一つないあんなところだな、と思った。砂漠に光が当る。砂漠を砂煙あげていまダンプカーが行く。そこがメキシコでもテキサスでもアラビアでもないのに、そう思った。男というより、男の子の空想である。

何度も見てあきない風景とは、私においては、どうやら風景らしくない風景のような気がする。絵葉

書のような風景、山水画のような風景はうんざりする。そんなものは日常茶飯のこととして見てきた。

故郷というものと風景というものが、重なりあっている気がする。旅を滅多にした事がないが、そこで出会い見つけた家並み、坂道、川原の風景とは、自分が子供の頃から見馴れ親しんだ故郷の風景のプリントである気がした。つまり風景とは、まったく自分一人の記憶の再現なのではないか、そんな気がする。

和歌山県の潮ノ岬から白浜辺りまでの海岸線を車で走ったことがあるだろうか？　その海岸線を、人は枯木灘海岸と呼ぶ。延々と岩場が続いている。そこへ行ったのは、新宮の母の家から白浜のイトコの家に立ち寄る為だった。高校一年になるオイを連れて、車で行こうという事になった。一時間半ばかり走り、腹が減ったというオイに誘われ、古座のドライブインに入った。

「ここに来た事あるか？」私は訊いた。

オイは首を振った。

「古座に」私は言いかけて止めた。オイには古座がどんなところであろうと知ったことではないのだった。訊くのも無駄なことだ、と思いあきらめた。「水の家」という小説の中で、この古座のことを書いたのだった。それは不確かな記憶だった。書く前に母に確かめてみようと思ったが、もしそれが自分一個の記憶ちがいであっても、本当のことであっても、母を苦しませることになると思い、止めたのだった。それは確かにこの古座の、川だった。夜だった。月夜だったか。母は水の中に入っていた。「ケンジ、ケンジ、ここへ来てみ」と言った。「きれいな魚おる」そう言った。その時私も水の中に入っていたのか、夜の川のふちに立って水の中に入ることをちゅうちょしていたのか、定かでなかった。まだ古座の祖母が生きているころだった。三人の伯父達も若かった。祖母は私が小学一年の時に死んだということを基にして逆算していくと、母と二人で古座の川に来たのは、五歳程の事だ。二人で入水しようと

したのか、それとも私が入水しても不思議ではなかったという思い入れをやり、その結果の記憶の合成か。そのころ母は、もういまの義父とつきあっていた。何度も孕み、堕ろしていた。義父と一緒に生活しはじめたのは、七歳の時だったから、母にしてみればそのころが一等つらい時だったかもしれない。揺れ動いていたはずだった。逆に、その記憶が正しくて、単に夏の盛り、自分の生れた場所の馴れ親しんだ川を見、水のにおいを嗅ぎ、昔の子供時代を想い出して母は水浴びをしたとしたらどうだろう。そう思い直して見た。なにやらそれのほうが、最初の夫の子供を四人、二度目に一人生んで、三度目の夫に出来た子を次々堕ろした母に似合っている気がした。入水死など心気くさくてやり切れない。母はまだ若かった。三十二、三であったはずだ。

その川を見たかった。二番目の姉の子供は、腹が減っていないがつきあって食べてやるという私より遅くのろのろとハンバーグライスを食べていた。姉にそっくりだと思った。祖母が危篤だと聞かされた時、母は、姉二人と私を連れて汽車に乗った。兄は仲間との仕事があると言って行かなかったし、上の姉は名古屋に働きに行っていたので、間にあわなかった。田園の道を歩きながら、二番目の姉は黙りこくっていた。三番目の姉は、歌をうたっていた。祖母は母の到着を待っていた。「ああ、チサか、坊も連れてきたか」と眼をあけて言い、それからすぐにこと切れた。その記憶も後で合成した具合でおかしいが、二番目の姉が、その通夜に食べろと言って出されたソーメンを、嫌だ、食べられない、と食べると自分までが死に穢(けが)されるとでもいうように泣いて拒んだのを覚えている。

車に乗って、狭い路地を入り、川に出た。降りた。オイは、時期はずれのビートルズをうたっていた。川幅が意外に広いのを知った。川口から海の潮が逆流して来ているのか、水は脹(ふく)らみ、青く、光っていた。記憶の中の川とは似ても似つかなかった。砂利の川原があったはずだった。川は浅く三歩か四歩中に入ったところで急にスリバチ型に深くつめたくなっていたはずだった。舟が半分水につかって置

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c